令和３年度研究助成 【音楽振興部門】より

深淵から光へ：シベリア抑留の音楽と芸術、記憶と未来への継承のための新しい表現による研究成果の社会実装

桜美林大学非常勤講師
森谷　理紗

シベリア抑留は、戦後、満州や千島列島などにいた60万人あまりの日本人たちがソ連軍によってシベリア・モンゴルの各地の収容所に移送され、その後数年にわたって労働に従事することとなった歴史的事象である。抑留を経験したのは多くが当時20歳前後の青年たちであったが、現在平均で96歳となり生の証言を聞くことができるのも今をおいてない。未だに不明な部分が多いシベリア抑留の実態解明は、喫緊の課題と言える。本研究では、音楽学の見地からシベリア抑留を捉え、残された創作物や、新たな作品を歴史継承に役立てることを目指している。

シベリア抑留と言えば「極寒」「飢餓」「重労働」の三重苦のイメージが強いが、その一方で各地の収容所で文化活動が盛んに行われていたことはあまり知られていない。音楽学の観点から見て、日本人の集団が越境の地で生死の狭間にありながら歌や・楽器・絵画・彫刻を創造し、楽劇団を結成するなど様々な文化的創造活動を展開したことは人間と芸術の根源的な関係性を考える上で非常に興味深い。また、現地のロシア人との交流は西洋的音楽と日本人が出会った異文化受容の特殊なケースであると言える。加えて、専門的に文化活動を行った音楽家たちの抑留体験は、他の一般のシベリア抑留者の記憶とは異なる様相を呈しており、彼らの足跡を辿ることはこれまで描かれてきたイメージとは違うシベリア抑留の別の面を見出すことに繋がる。

日本人捕虜たちのシベリア抑留に関する研究は1990年の情報公開以降、これまで日露の歴史学者や政治学者によって研究されているほか、2000点を超える元抑留者自身の手記などが残されている。しかし、日本人のシベリア抑留と文化面について芸術学・音楽学の視点から扱う研究は国内外にほぼ例がない。筆者のこれまでのロシアの公文書館や日本国内の元抑留者の音楽家らへの調査からは、1945年から1956年の日本人抑留者の各地の収容所における生活や文化活動の起こりとその展開の具体的な内容が詳らかになってきた。

シベリア各地の収容所では、最初の厳しい冬に約１割の６万人の死亡者が出た。しかし、その時期を越すと次第に労働の合間に抑留者の自己表現としての詩句・歌・絵画等の自発的な創造活動が各地で芽生えていった。木彫りのスプーンや仏像、日記のようにしたためられた詩歌などの個人的な創作はやがて小さなサークルの形成に繋がっていった。さらに捕虜たちの要望を受けて慰労のための演芸会が催されるようになると、元より芸術を政策に利用していたソビ

エトはこれを認め、次第に思想教育を目的とした様々な文化的活動の一手段として戦略的に楽劇団を組織し、地区における収容所の巡回演奏やいくつもの地方文化コンクールが行われるに至った。

文化芸術はソ連において共産主義思想の主要なプロパガンダツールであり、「武器」とみなされていた。そのため、文化水準の向上は重要な課題であり、外国人収容所においてもそれが反映されていた。こうした背景から、日本では音楽や演劇の経験がない人々が生まれて初めて自ら演じ、あるいは創作するという状況が起こり、映画を初めて見る者がおり、さらには日本では学校に行けなかった人がカタカナサークルで文字を書けるようになったなど、多くの日本人が図らずも異国の地で多様な文化的体験をした。ロシアの公文書館所蔵の帰国直前の日本人によって書かれた感想文にも、収容所によってはコンクール優勝のために労働免除で音楽・演劇・舞踊の練習が日夜行われ、ロシア人の収容所長自ら演技歌唱指導をしたことが思い出として書き残されている例がある。

また、日本の音楽史の脈絡の中でシベリア抑留を捉えると、さまざまなジャンルの音楽に影響があったと言える。まず、クラシック音楽では、戦前から音楽活動を行いシベリアでは「沿海州楽劇団」として専門的に活動したチェリストの井上頼豊、ヴァイオリニストの黒柳守綱、声楽家の北川剛らが、帰還後にロシア音楽を日本に紹介していった一連の流れは重要である。そして、一般的な大衆の層では、各地の収容所内ではロシアの歌にさまざまな日本語訳詞が施され歌われたが、これらの歌は多くの帰還者たちによって日本に伝播され、戦後のうたごえブームのレパートリーの中心となった。彼らを技術的に底上げし指導していたのが、先に挙げたクラシック系の音楽家たちであった。そしてポピュラー音楽界においても歌手の三波春夫や青木光一、作曲家の吉田正をはじめ歌謡曲の黎明期に活躍する人物も少なくなかった。このように、多角度的に見てもシベリア体験者の音楽家や、彼らの収容所における音楽体験が戦後の日本に与えた影響の大きさは計り知れず、越境の地に連なる日本音楽史の隠された歴史として日本人のシベリア抑留体験は重要なトピックである。

今回の研究助成では、上に述べてきたシベリア抑留の音楽学的研究の成果をもとに、音楽や芸術のソフトパワーについて検討し、歴史継承に有効な媒体としての音楽の可能性の模索をするプロジェクトを進めている。オーラルヒストリーの当事者である語り部が僅かになった今、歴史の追体験を可能にするのが、創作物であると考えられる。例えば歌の歌詞に綴られた当時の状況や心境の表現から、我々は彼らの環境を知り、あるいは作者の感情を感受して、理解す

写真　「ラッパ付きヴァイオリン」 ©森谷理紗
白樺の素材は柔らかくこもった音色を作り出すため、ラッパが共鳴器として音量を補っている。
【材料】白樺（裏板・横板・テールピース）、シベリア赤松（魂柱）、メープル（指板）、松（表板）、電線の銅線（G線弦）、スチール（弦）、蜜蝋（コーティング）、亜麻仁油（コーティング）、墨汁（指板塗料）
【製作】中嶋弦楽器工房　【監修】森谷理紗

ることができる。アートの社会実装は近年注目されているが、アートを通じて社会にメッセージを発信するという方法は、歴史を後世の社会に伝える目的にも有用であろう。

本プロジェクトの特徴は、楽器や鳴り響いていた音の再現を行い、歴史の中の記憶を「見」「聞き」「感じる」ことのできるものへ変換し、さらに企画展やレクチャーコンサートの実施によって多くの人の目に触れる機会を作るという社会実装の試みを行うことにある。11月２日より平和祈念展示資料館で現在開催中の企画展では、シベリア抑留下の音風景を再現するためにシベリアで発行された歌曲集の曲を実際に歌ったものを展示の一部としているほか、「楽器再現プロジェクト」として、白樺の木を使った手工品のラッパ付きヴァイオリンを展示し、その楽器で演奏した音源を館内で流している。この楽器は、元抑留者片岡薫氏の体験記『シベリアエレジー－捕虜と「日本新聞」の日々』（1989）内に登場する手作り楽器、ラッパ付きの小さなヴァイオリンを構想のベースとしており、これに材料・構造・製作方法に関する複数の歴史的史料や抑留体験者の手記の情報を総合し、楽器製作者中嶋卓氏の協力を得て製作された。シベリアの収容所では伐採作業で余った材料などから多くの創意工夫を凝らした手作りの楽器が製作されたが、いずれも現存せず我々がその音の鳴り響きを聴くことはできない。だが、史料を駆使して実際の音響空間に近いものを聴取可能なものにすることで、歴史的資料と同等の価値を持つのではないだろうか。さらにこうした復元楽器を使って新しい作品を創作することなどを通して、歴史的な音楽研究と並行して新たな時代の音楽実践の可能性を検討し、音楽界に提示していきたいと考えている。